

参考資料
分類名〔病害虫〕

参 15

イチゴ品種「にこにこベリー」の各種病害に対する耐病性比較

宮城県農業・園芸総合研究所

要約

イチゴ品種「にこにこベリー」の各種病害に対する耐病性を調査した結果、うどんこ病に対しては「とちおとめ」より優れ、「もういっこ」と同等からやや優れる。萎黄病に対しては「もういっこ」よりやや劣るが「とちおとめ」と同等である。炭疽病に対しては「もういっこ」、「とちおとめ」と同等である。

1 取り上げた理由

イチゴ品種「にこにこベリー」は早生で収量性に優れ、今後普及が見込まれる品種である。本品種を普及するにあたり、各病害に対する耐病性を評価することは重要であり、生産者が栽培する上での参考となる。本研究では、「にこにこベリー」の各種病害に対する耐病性について、県内での主要品種「もういっこ」、「とちおとめ」と相対評価したので参考資料とする。

2 参考資料

- 「にこにこベリー」のうどんこ病に対する耐病性は、「とちおとめ」より優れ、「もういっこ」と同等からやや優れる（図1）。
- 「にこにこベリー」の萎黄病に対する耐病性は、「もういっこ」よりやや劣るが、「とちおとめ」と同等である（図2）。
- 「にこにこベリー」の炭疽病に対する耐病性は、「もういっこ」、「とちおとめ」と同等である（図3）。

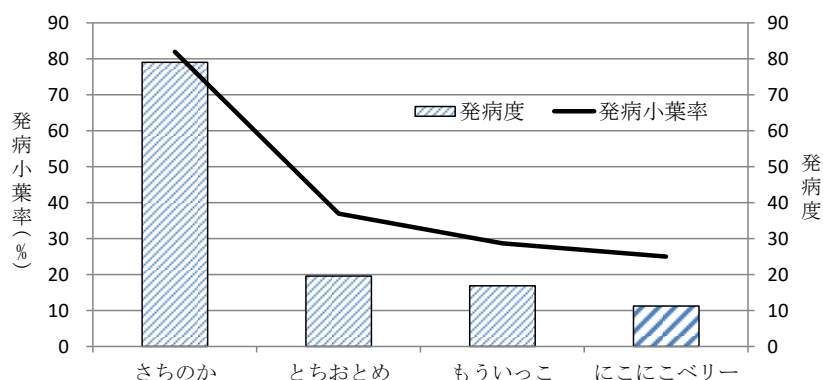


図1 「にこにこベリー」のうどんこ病に対する耐病性（平成30年）

注1) 自然発生による育苗トレイによる試験。

注2) 調査は平成30年2月8日に下記の基準で実施。

$$\text{発病度} = \frac{\sum (\text{発病程度別指数} \times \text{株数})}{(4 \times \text{調査株数})} \times 100$$

0：発病なし，1：病斑面積率が小葉面積の5%未満，2：病斑面積率が小葉面積の5～25%未満，3：病斑面積率が小葉面積の25～50%未満，4：病斑面積率が小葉面積の50%以上

注3) 調査株数：さちのか（24株），とちおとめ（30株）

もういっこ（25株），にこにこベリー（29株）

3 利活用の留意点

- うどんこ病の調査結果は、育苗トレイを用いた自然発生による試験である。
- 萎黄病及び炭疽病の調査結果は、接種による試験である。
- 炭疽病試験の接種に供試した菌株は *Colletotrichum gloeosporioides* である。
- 「にこにこベリー」を栽培する際の病害の防除対策は、他品種と同様に実施する必要がある。
（問い合わせ先：宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部 電話 022-383-8111）

4 背景となった主要な試験研究の概要

(1) 試験研究課題名及び研究期間

果菜類における総合的作物管理を目指した総合的病害管理技術の開発（平成 29～平成 33 年度）

(2) 参考データ

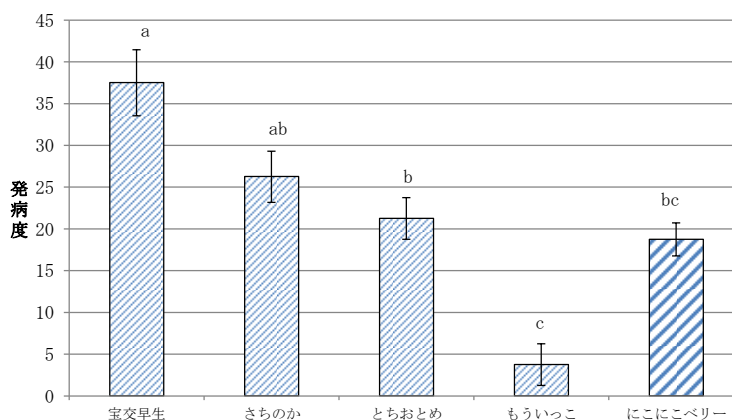


図2 「にこにこベリー」の萎黄病に対する感受性（平成30年）

注1) 接種によるプランター試験。

注2) 萎黄病菌の接種は、平成30年11月9日に孢子懸濁液（ 7.5×10^8 個/ml）を、11月22日に孢子懸濁液（ 7.5×10^8 個/ml）を10ml/株灌注。

注3) 調査は1回目の接種56日後の平成31年1月4日に下記の基準で実施。

発病度 = Σ (発病程度別指数 × 株数) / (4 × 調査株数) × 100

0: 発病なし, 0.5: 小葉1枚の僅かな奇形・黄化, 1: 小葉の僅かな奇形・黄化,

2: 小葉の奇形・黄化などの典型的病徴, 3: 株の萎縮・萎凋, 4: 枯死

注4) 1区2株 5反復

注5) バーは標準誤差。

注6) 異なるアルファベット間には5%有意水準で有意差あり。

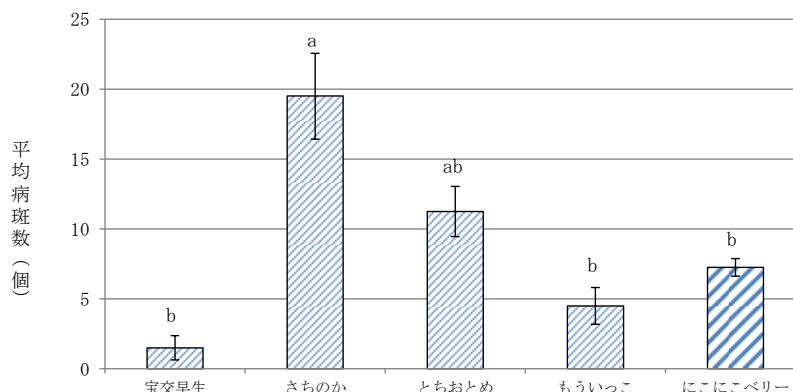


図3 「にこにこベリー」の炭疽病に対する感受性（平成30年）

注1) 接種による育苗トレイ試験。

注2) 炭疽病菌の接種は、平成30年11月21日に孢子懸濁液（ 1.0×10^8 個/ml）

を、噴霧接種により実施。

注3) 調査は接種12日後の平成30年12月3日に各株の展開4複葉の病斑数を計測。

注4) 1区5株 4反復

注5) バーは標準誤差。

注6) 異なるアルファベット間には5%有意水準で有意差あり。

(3) 発表論文等

イ 関連する普及に移す技術

イチゴ促成栽培用品種「もういつこ」の病害抵抗性（第82号参考資料）

大規模施設における促成イチゴ栽培のIPM体系（第93号普及技術）

ロ その他

北日本病害虫研究発表会で発表予定

(4) 共同研究機関

なし